▶東北・北海道地区教育研究集会大学部会〈2面〉
▶第10回大学新任教員研修会　〈 〃 〉
▶第9回全国事務局長・事務長会議〈 〃 〉
▶第67回全国・第64回関西地区大学部会研究集会〈3面〉
▶第8回東北・北海道地区新任教師研修会〈 〃 〉
▶加盟校動静／公募　〈 〃 〉
▶全国広報委員会開催報告　〈 〃 〉
▶第3回キリスト教活動担当事務職員研修会〈4面〉
▶中小規模学校連携協力懇話会〈 〃 〉
▶キリスト教Q＆A／行事予定〈 〃 〉

キリスト教学校教育 11

2022・2023年度教研テーマ
希望と喜びに生きる―新たな転換期に立つキリスト教学校

（一社）キリスト教学校教育同盟
〒169―0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館72号室
電　話　03（6233）8225
ＦＡＸ　03（6233）8226
理事長　西原　廉太
編集人　田村　浩一
頒価200円（加盟法人の購読料は会費に含まれています）
（毎月1回15日発行）

建学の精神を今この生活に

高橋和也

第65回学校代表者協議会
11/3(金)～4(土)
(学)自由学園で開催

1921年、創立者の羽仁吉一、もと子夫妻は「生徒をして自ら教育することに熱心になるやうに導くことは何よりも大切な私たちの務め／自ら生徒の興味を、否生活を、出来るだけ社会と接触させて行きたい／神を愛したいと思う力、…この心を育み育てるために、人間のすべての生活がある」との教育目標を掲げ、自由学園を創立しました。各種学校としての出発でした。そして一昨年の2021年、創立100周年を迎えました。

100周年の節目を前に自由学園では、建学の精神に立ち返り改革指針を掲げ、現在学校改革に着手しています。〈キリスト教精神を根底に据えて、常に「一人ひとり」を大切にし続ける学園、子どもたちも教職員も「自ら学び続ける人」になる学園、よりよい「社会をつくる人」が育ち続ける学園〉、そして〈共生共学〉という指針です。この指針のもと、2024年より中高段階の共学化を決定し、現在準備を進めています。

「共生共学」は、「共に生き、共に学び、共によりよい社会を創り出す学校」を表し、「共生」には以下３つの意味を込めました。

第一に、人と人の共生です。世界のネットワーク化は飛躍的に進化する一方、多様で複雑化した世界で、国家、民族、宗教、文化など、様々な立場や利害が衝突し、対立があらわになっています。私たちはこれまで以上に、さまざまな背景を持った多様な人が共に学ぶ環境を整え、共に生きる平和な社会を創り出す人が育つ学校を目指します。

第二は人間と自然との共生です。気候変動を始めとする環境問題は地球規模に拡大し、人類は人間中心の生き方を、持続可能な生き方へと転換することが求められています。従来の自然から学ぶ実践、生徒の手による環境保全等の取り組みを、より深く社会の課題に関連付け、今後この学びをさらに発展させていきます。

第三は、一人ひとり誰もが、神の愛の中に「共に生かされている」かけがえのない存在であるという信仰的な人間観を教育の土台に据えることです。

羽仁もと子は「神至上主義の生きた団体が、殊に現在の教育の世界に必要であり、それがまた永遠の本当の教育のたましいでなくてはならないために、自由学園は生まれることを許され、存在することを許され、また永く生きなくてはならないのである」と述べています。この精神を今この日々の学校生活の中でいかに生きたものとしていくことができるか。「思想しつつ　生活しつつ　祈りつつ」歩む学校であり続けたいと思います。

〈自由学園学園長〉

キリスト教学校教育懇談会主催 第21回講演会（オンライン開催）
災害支援とキリスト教学校 ―共に祈り、共に歩もう―
11月18日（土）13時　参加費無料

「キリスト教学校教育懇談会」は日本カトリック学校連合会とキリスト教学校教育同盟が共同して組織し運営しています。今年も同会主催第21回講演会が、11月18日（土）13時から16時40分まで、オンライン（Zoom）開催されます。加盟校の教職員とキリスト教教育関係者が参加対象となります。

今年は国内外で頻発する災害とその支援活動について、キリスト教学校・団体による災害ボランティアの実践活動を、改めてキリスト教教育の観点から取り上げます。菊地功カトリック東京大司教による基調講演では、神学的な観点、グローバルな視野から「なぜキリスト教は人を助けるのか」と題して災害支援の活動を捉えます。続いて、カトリック校のカリタス学園、プロテスタント校の恵泉女学園から、キリスト教学校における災害支援の実践報告があります。その後、グループ討議と全体会が行われます。

要項・チラシは加盟学校法人宛に送付済みで、同盟HPのお知らせ欄からも閲覧可能。参加希望者は、要項・チラシのURL、または左記のQRコードから申込みフォームにお入りください。

問合せは事務局まで。

夏期研修報告
第13回 中堅事務職員リトリート
テーマ
建学の精神の継承

第13回中堅事務職員リトリートは、同志社大学今出川キャンパスにて、8月23日（水）～24日（木）に開催されました。4年ぶりに対面形式で行われた本研修会の2023年度主題は「希望と喜びに生きる―新たな転換期に立つキリスト教学校」。加盟16法人より19名が参加されました。

小﨑眞氏

1日目は、同志社女子大学学長の小﨑眞先生より「記憶の隙間に隠された宝～キリスト教（主義）教育の風に誘われ～」と題する主題講演がありました。真理や正しさの複数性こそが私たちを豊かにしてくれるものであり、自分に都合の良い正しさだけに囚われず忍耐強く他者と関わり様々な見方を探っていくことが大切だと小﨑先生は語られました。メンバーが相互に補完しながら能力を発揮できる環境は、組織に流動性を生み出します。組織を支える役割を持つ中堅事務職員には、異なる意見に耳を傾け、少数派の声を吸い上げて職場・教育現場を活性化させていくことが期待されている、と励ましの言葉をいただきました。

2日目は、同志社大学キリスト教文化センターの森田喜基先生より「キリスト教の教派について～お互いの理解のために～」と題して特別講演をしていただきました。各学校の創立のルーツとなるキリスト教の教派の国内外の歴史について分かりやすくご説明いただきました。所属校の「建学の精神」への理解を深めるとともに、個性豊かなキリスト教主義学校が連帯する意義や、私たちが共に目指す教育目標についても考えるきっかけとなりました。

森田喜基氏

各講演後はグループに分かれ、講演の感想や意見を交換しました。また事前課題をもとに、各学校で行われている自校教育について情報共有し、

（2面につづく）

学生聖歌隊の賛美

聖書のことば

「愛に根ざして真理を語り、あらゆる面で、頭であるキリストに向かって成長していきます」（エフェソの信徒への手紙　第4章15節）

小・中学校の1年生の一学期の授業では、必ず創世記の天地創造について話をします。質問が多く出てくる聖書箇所の一つでもあり、「本当のことなの？」と純粋に聞いてくる子もいます。私はその質問に対して「本当だよ」と肯定します。ただし、それは天地創造が「史実である」という意味での肯定ではなく、「真理である」という意味での肯定です。

旧約聖書においては神の本性を表す言葉として、真理・真実という言葉が用いられます。神様はどのような存在であり、何を望まれているか。天地創造の物語には、神様が全知全能であること、この世界とそこに生きる生物を愛したこと、人には担う使命があることなどが書かれており、それらは真のことです。

そして、新約聖書の時代になると、真理は主なるイエス・キリストそのものを表す言葉として用いられるようにもなりました。イエス様を通して神様の望みや約束はより明確になり、真の意味が伝えられました。

聖書には一般的には信じ難いと思われる出来事も語られています。キリスト教学校に奉職する教職員であれば、子ども達から「本当なの？」と問いかけられる可能性が誰にでもあります。その時に、自らがしっかり理解していないからと、もしかしたら言葉を濁すことがあるかもしれません。ですが、聖書に記された真理は揺るぎません。だからこそ言葉を濁す必要もありません。（専門的なことは専門家に任せつつ）キリスト教学校に奉職する一人ひとりが、それらの出来事に真の意味がある、真理であると力強く肯定すること、その姿は子ども達の成長に大きな影響を与えます。

自身の力だけで事を為そうとするのではなく、父なる神様とイエス様により頼みながら、愛を持って多くの方々と共にこれからも子ども達に向き合っていければと思います。

〈聖ステパノ学園小学校・中学校聖書科教諭〉

咲間直人

（1面よりつづく）

今後「建学の精神」を継承し活かしていくために参加者自身が具体的に取り組んでいきたい事柄などについて話し合いがなされました。「黙想の時」では同志社大学オルガニストの川崎寿美氏によるパイプオルガンの音色や学生聖歌隊による賛美に耳を傾けつつ、静かに自分と向き合う時間が持たれました。2日目の最後には、各グループで話し合ったことを発表して全体で共有しました。

この研修会での語らいと学び、気づきが、各学校の児童・生徒・学生、そして教職員との関わりの中で実践されていくことを願っています。会場校の同志社大学、ご準備くださった先生方に心より感謝申し上げます。

西岡麻祐子

〈神戸女学院大学チャプレン室職員、中堅事務職員リトリート実行委員〉

東北・北海道地区教育研究集会大学部会

主題　希望と喜びに生きる
―新たな転換期に立つキリスト教学校

2023年度の東北・北海道地区教育研究集会大学部会は、昨年に引き続き主題「希望と喜びに生きる―新たな転換期に立つキリスト教学校」のもとに8月24日（木）9時から16時まで行われました。久しぶりの対面開催で、当番校は北星学園大学、5大学より11名の参加を得て、ホテルエミシア札幌を会場に行われました。

開会礼拝でジェームズ・アリソン氏（北星学園大学）が、創世記1章26～31節から「AIジーザスとテクノロジーによるキリスト教教育」と題してメッセージを語られました。近年アメリカで話題になっているAIジーザスを紹介し、AI時代におけるキリスト教育のあり方について問題を提起されました。その後、東北・北海道地区代表理事の東北学院の大西晴樹院長・学長による挨拶の後、当番校である北星学園大学・北星学園大学短期大学部の大坊郁夫学長から挨拶があり、その後に原田浩司教研全国委員（東北学院大学）から主題解題がされました。

第1回の講演は、大坊郁夫先生（北星学園）により「ウェル・ビーイングをめざす大学教育の視点」という題で行われました。講師は専門の心理学のなかからポジティブ心理学を取り上げ、コミュニケーションが閉塞的に陥りがちな現代のなかで、大学教育を通してどのようにウェル・ビーイングを達成できるかについて、理論と実践例を交えながら紹介されました。特に欧米に見られる「獲得的幸福感」だけではなく東洋的な「協調的幸福感」のバランスが、ウェル・ビーイングのめざすべきところであることを提案されました。

大坊郁夫氏

末光眞希氏

その後休憩を挟み第2回の講演は、末光眞希先生（宮城学院女子大学前学長）が「愛のある知性を！―コロナ禍に学ぶ教学の臨床性」という題で行いました。長年の間、半導体工学研究者として実績を積んでこられた講師が、2020年4月に宮城学院女子大学学長に就任し、2023年に定年退職するまでに問い続けられた、時代に求められる高等教育（専門と教養）のあり方について様々なエピソードを交えてお話しされました。この時代とは「変動性・不確実性・複雑性・曖昧性」（VUCA）とAIの時代のことであり、それらを加速させたコロナ禍において、講師は『キリスト教学校の希望と喜び』は臨床知としての新しいリベラルアーツ教学の提供にある」という結論に到達されたことを披瀝されました。そして教養のあり方について具体的な事例（例えば「文理融合」）などについて示唆に富む提案をされました。

古川敬康氏

懇親会（昼食）では、各校の近況報告が行われました。午後は二つの分団に分かれ、講師を交えて質疑や闊達な話し合いが行われました。その後全体会が開かれ、各分団で討議された内容が発表され、講演者からの総評を伺いました。

最後に閉会礼拝があり、原田浩司委員がコリントの信徒への手紙一4章1―5節から、「管理者に求められるのは」と題してメッセージを語られ、「忠実な管理者」として働きの重要性を説かれました。最後に、北海道地区理事である北星学園の古川敬康理事長・学園長の挨拶をもって研究集会を閉じました。

久しぶりの対面開催であったため準備や手続きに手間取ることもありましたが、多くの方の協力によって滞りなく開催が出来たことは感謝でした。今後は、より多くの参加者を得て、転換期に立つ時代とそれに応えるキリスト教学校のあり方について共に考える機会であればと願っています。

日髙嘉彦

〈北星学園大学・北星学園大学短期大学部チャプレン・教育研究委員会全国委員〉

第10回 大学新任教員研修会

主題　キリスト教大学とは

2023年度大学新任教員研修会は、8月25日（金）13時～15時、Zoomによるオンラインで開催されました。キリスト教大学23校から44名の参加者（講師・実行委員含む）でした。小見のぞみ実行委員長（関西学院）による開会礼拝からプログラムが始まり、続いて西原廉太教育同盟理事長（立教大学総長）により講演がなされました。冒頭で研修会参加者が勤務する各キリスト教大学の建学の精神・理念・教育方針が確認されました。諸キリスト教大学の精神に共通している「真理を探究すること」「この世界・社会・隣人のために奉仕すること」はキリスト教大学が大切にしている両輪です。

さらにその精神が意味するところについて、聖公会神学に基づいて語られました。VIA MEDIA（中道）という標語は、私たちが真理を求め続ける旅人であることを示し、道の片側に立ち止まった答えへの固着、すなわち絶対主義をとらない姿勢を示しています。大学の起源は聖職者養成にありました。霊的痛みを癒す司祭・牧師、身体的痛みを癒す医者、社会的痛みを癒す法律家、こうした癒しをもたらす人物を育成するのが大学の使命・建学の理由なのです。キリスト教大学はこの歴史的経緯を深く知っており、現代社会にあってもそのような姿勢を持ち続ける共同体であることが語られました。

講演後はグループ協議の時間を持ち、各グループの司会を研修会実行委員が担当しました。報告者が参加したグループでは、メンバー全員が自己紹介し、併せて講演の感想やキリスト教大学へ勤務しての印象をシェアしました。異口同音に語られたのは、キリスト教大学では学生と教員との人格的関わりが豊かであり、一人ひとりをかけがえなく大切にする眼差しが溢れているとの感想でした。他方で、そうした関係性における教職員の優しさが時に、厳しさを失わせるのではないかとの意見も提出され、キリスト教理念と教育のあり方をめぐって各自の考えを語り合い、活発で有意義な協議の時間となりました。

グループワーク後は山下智子実行委員（同志社）の司会により全体会が行われました。講師から講演の補足、質問への応答がなされました。最後に閉会礼拝が東彩子実行委員（西南学院）により執り行われ、参加者一同祈りを合わせて、それぞれの務めへ派遣されました。

この研修会はキリスト教大学への勤務3年目位までの方々を主たる対象としています。本年度は都合がつかなかった方も、ぜひ次年度以降に参加いただけたらと願っています。

松本　周

〈宮城学院女子大学、大学新任教員研修会実行委員〉

司会・開会礼拝
小見のぞみ氏

講演
西原廉太氏

全体会司会
山下智子氏

閉会礼拝
東　彩子氏

第9回全国事務局長・事務長会議

主題　キリスト教学校のガバナンスと寄附行為

第9回全国事務局長・事務長会議が、9月1日（金）～2日（土）の二日間、仙台市の東北学院大学五橋キャンパスを会場として、39法人、52名（講師、事例発表者、教育同盟事務局長を含む）の参加を得て開催されました。

本会議は、キリスト教学校の事務組織の長である事務局長や事務長に、それぞれの学校の建学の精神や教育理念、使命を再認識し、理解をより一層深めていただくために、そして全国から集まった他法人との交流を通じて情報交換・共有していただくことを目的として2015年度から始まった会議です。新型コロナ拡大による影響により4年ぶりの対面開催となりました。

第9回目の開催では、私立学校のガバナンスのあり方が問われ、2025年の私学法改正施行に伴い、ガバナンスをより強固なものにしていくことをテーマに掲げ、寄附行為改正に向けて先行事例や情報交換を行うことを目的にいたしました。

講演　伊藤彰浩氏

初日は、星野薫実行委員長（フェリス女学院事務局長）による開会礼拝、東北学院の大西晴樹院長・学長による会場校挨拶に続いて、基調講演として、キリスト教学校のガバナンスと寄附行為について研究をしておられる伊藤彰浩先生（西南学院大学）から「学校法人ガバナンス改革とキリスト教系学校法人」と題して講演を賜りました。

キリスト教学校で働く者は、建学の精神について議論し、キリスト教学校で働く意味の再確認と帰属意識の向上が重要であることを強調されたことは大変印象に残りました。

引き続き、「寄付募集の取り組み」の事例として田中裕一氏（同志社大学募金課長）から「同志社大学の事例」、萩野紀之氏（学校法人聖学院広報センター事務室・ASF校友センター）から「中小規模学校の寄付戦略～学校法人聖学院の事例～」と題して順次事例発表があり、その後、5グループに分かれ、「キリスト教学校としてのガバナンスのあり方について」「寄付事業について」「寄附行為の改正について」をテーマとして活発な討議・情報交換を行いました。その後、東北学院大学の新キャンパスである五橋キャンパスの施設見学を行いました。先進的な都市型の新キャンパスは刺激的なものでした。夕刻からは夕食を兼ねた情報交換会が開催され、相互の交流と親睦を深めることができました。

2日目は、宇田川篤実行委員（恵泉女学園事務局長）による朝礼拝に始まり、その後、前日と同様に5つのグループに分かれ、間近に迫っている私学法の改正をテーマに「寄附行為の改正」についての課題や進捗状況について事例紹介を行いながら意見・情報交換を行いました。

引き続いて行われた全体会では、2日にわたる5グループでの討議内容がそれぞれのグループから報告され、参加者全員で討議の内容を共有することができました。

最後になりましたが、ご多忙の中、事前準備や当日の会場運営等、多大なるご協力とご支援を賜りました東北学院大学の皆さまに厚く御礼申し上げます。

大羽康二

〈西南学院事務局長、全国事務局長・事務長会議実行委員〉

五橋キャンパスを見学（押川記念ホール）

グループ討議

第67回全国・第64回関西地区 大学部会研究集会

主題 希望と喜びに生きる
―新たな転換期に立つキリスト教学校

9月4日（月）、第67回全国・第64回関西地区大学部会研究集会が、「希望と喜びに生きる―新たな転換期に立つキリスト教学校」をテーマにオンラインで行われ、29名の方が参加しました。

主題講演はまず、東北学院大学・川島堅二先生が「キリスト教学校における宗教リテラシー教育の実践について―とくにカルト予防の観点から」と題し、宗教リテラシー向上には一般の方や学生に対し、適切な情報提供を行うのが有益であること、また有効な手立てとして、カルト宗教は、すべて自分たち以外は誤りとする排他主義なので、対応するためには宗教多元主義の視点が必要と述べられました。

川島堅二氏

次に、「地方の小規模大学の抱える課題―旧統一教会の問題に触れながら」と題し、敬和学園大学・下田尾治郎先生が、地方の小規模大学は、地域社会との緊密な連携で恩恵を受ける一方、地域社会では統一教会の浸透等の様々な問題ある現状で、清濁併せ呑まねばならない面があるので、キリスト教的価値観を通して地域社会を聖化してゆく務めを我々は忘れてはならないと述べられました。

下田尾治郎氏

三人目の中部学院大学・高木総平先生は「キリスト教教育への問いとしてのカルト問題―カルト（問題）カウンセリングから学んだこと」と題して、ご自身のカウンセリング経験から、なぜ学生が反対されてもカルトに行くかの原因について分析されました。いじめや孤独などを契機に人生の不安を感じる者に、カルトは彼らの経験したことのない身体体験や宗教的体験（ただし偽物の）を示してそれらへの解決があるような錯覚を与え、死と苦難への恐怖を通してマインドコントロールを行う、一方キリスト教会はそれに対抗する解決を示しているだろうか、「生きる意味」を与える体系的な世界観を示しうるはずなのに、出来ていないのは、我々の問題ではないか、と鋭く迫られました。

高木総平氏

最後に、梅光学院大学・樋口紀子先生からは、『『建学の精神』に基づいたキリスト教教育の試み―教職員伝道チームによる中高大連携プログラム』と題し、梅光学院での、中高大を通じての連携したチャペル等の活動、学生による途上国の子ども支援活動、教職員のミッションチーム活動などの建学の精神を生かす試みが紹介されました。

樋口紀子氏

講演後、4つの分科会に4人の講師が順番に参加し、質問や議論の時間をもち、今後の課題についての話し合いがなされました。関西地区としては4年ぶりの開催で、今後も希望の福音に立つ教育を期して、この集会を閉じることができ、感謝です。

森田美芽〈大阪キリスト教短期大学、教研大学部会関西地区委員〉

第8回東北・北海道地区 新任教師研修会

テーマ 教師であること、教師になること

2023年度東北・北海道地区第8回新任教師研修会が、9月4日（月）に、山形学院高等学校を会場に開催されました。参加者は、5法人、14名でした。

研修会に先立ち、会場校の学校礼拝に参加し、山形学院の石川学理事長の説教に生徒と共に耳を傾けました。

研修会は会場校の石川理事長による開会礼拝、佐藤圭一校長による挨拶で始まりました。その後、敬和学園理事長の榎本榮次先生の講演「教師であること、教師になること」を聴きました。榎本先生は、聖書の言葉「私はあなたがたを私の民とし、私はあなたがたの神となる」（出エジプト記6章7節・聖書協会共同訳）の引用から講演を始められ、教師が、生徒との関わりを通して「教師となる」ことの大切さを話されました。教育とは、時間をかけて生徒と共に泣き、そこに居合わせることであること、困ったことに直面する中で教師は教師となっていくこと…等、心のこもったメッセージを聴き慰めと励ましを受ける講演となりました。その後の分団協議では、講演を受けての話題を中心に、各校の情報交換や、新任教師として考えていることを分かち合う時となりました。スクールモットーや普段の礼拝の様子等、互いの学校の情報を共有し、キリスト教学校として大切にしているものを改めて確認することができました。

昼食は、会場校調理科の生徒が集団調理実習で作った食事をいただき、秋の味覚を味わうことができました。その後、キャンパスツアーをしながら、授業見学を行い、ティータイムには、同校の生徒が商品開発に携わったさくらんぼ大福をいただきました。会場校の遠藤尚幸氏の閉会祈祷をもって研修会が閉じられました。

調理科の生徒たちが作った昼食

一人一人の生徒に向き合うことの大切さ、困難な関わりの中に、きらきら光るダイヤモンドが隠れている。そんなことを教えられた研修会となりました。各校のこれからの歩みに、神様の恵みと祝福を祈ります。

遠藤尚幸〈山形学院高等学校聖書科教諭〉

加盟校動静

新島学園短期大学
開学40周年を迎え、10月14日（土）13時から記念式典と講演会が高崎市文化会館で開催された。

公募

※特記のない採用予定日は24年4月1日です。

▽新島学園短期大学
▼キャリアデザイン学科
職種＝キリスト教学（宗教主任）教授、准教授、又は専任講師1名
応募締切＝11月30日
問合せ＝☎027-326-1155

▽フェリス女学院大学
▼国際交流学部国際交流学科
職種＝フランス語・フランス文化　学科所属契約教員（教授、准教授又は助教）1名
応募締切＝11月28日

▼全学教養教育機構（CLA）
職種＝英語科目　嘱託教員（講師）1名
応募締切＝11月10日
問合せ＝☎045-812-8211

▽山梨英和大学
▼人間文化学部人間文化学科
職種＝臨床心理学（大学院人間文化研究科兼担）助教1名
応募締切＝11月24日
問合せ＝☎055-223-6020

▽四国学院大学
▼文学部
職種＝日本近現代史　准教授又は助教1名
応募締切＝12月1日
問合せ＝☎0877-62-3969

▽活水女子大学
▼健康生活学部生活デザイン学科
職種＝被服分野　教授、准教授、講師又は助教1名
応募締切＝11月27日

▼看護学部看護学科
職種＝①母性看護学②基礎看護学　准教授、講師又は助教　①1名②2名
応募締切＝11月30日
問合せ＝☎095-822-4107

▽九州ルーテル学院大学
▼人文学部心理臨床学科
職種＝公認心理師養成担当　助教1名
応募締切＝11月30日
問合せ＝☎096-343-1600

▽遺愛女子中学・高等学校
職種＝理科（物理）専任教諭1名
応募締切＝12月1日
問合せ＝☎0138-51-0418

▽青山学院高等部
職種＝数学科　臨時特別教諭1名
応募締切＝11月13日
問合せ＝☎03-3409-3880

▽恵泉女学園中学・高等学校
職種＝園芸科　嘱託教員1名
応募締切＝11月17日
問合せ＝☎03-3303-2115

▽香蘭女学校中等科・高等学校
職種＝理科　常勤講師又は非常勤講師1名
応募締切＝11月15日
問合せ＝☎03-3786-1136

▽北陸学院中学校・高等学校
職種＝情報科　専任教諭1名
応募締切＝11月17日
問合せ＝☎076-280-3858

▽梅花中学校・高等学校
職種＝①保健体育科②国語科③社会科④英語科⑤養護⑥⑦数学科⑧情報科　①～⑥常勤講師　①②⑥⑦各2名③④⑧各若干名⑤1名
応募締切＝11月10日
問合せ＝☎06-6852-0001

▽大阪女学院中学校・高等学校
職種＝英語科　専任教員1名
応募締切＝12月11日
問合せ＝☎06-6761-4013

▽関西学院高等部
職種＝地理歴史・公民科　契約教員、国語科専任教諭　各1名
応募締切＝11月10日
問合せ＝☎0798-51-0975

▽青山学院大学系属浦和ルーテル学院小中高校
職種＝スクールカウンセラー　常勤講師1名
応募締切＝11月17日
問合せ＝☎048-711-8221

▽国際基督教大学高等学校
職種＝グローバル教育コーディネーター　非常勤1名
応募締切＝11月10日
問合せ＝☎0422-33-3401

▽頌栄短期大学
職種＝嘱託職員　若干名
採用予定日＝24年4月1日迄の日程で応相談
応募締切＝11月10日
問合せ＝☎078-842-2541

2023年度 全国広報委員会が開催されました

2023年度全国広報委員会が9月18日（月・祝）に教育同盟事務局会議室で開催されました。Zoomによるオンライン併用ではありましたが、対面による開催は4年ぶりでした。この会議は年に一度、広報担当理事と各地区の広報委員、実務委員（関東地区）が集まり、教育同盟の一年間の広報活動の振り返りと今後の活動、新聞作りのあり方などを討議するために開いています。今回は広報担当理事、全国の地区委員5名、実務委員4名、事務局2名の計12名が参加しました。

赤井慧委員（尚絅学院）の開会祈祷、各委員の所属学校紹介と自己紹介、2022年度事業報告と2023年度事業計画の確認があり、続いて各地区の「キリスト教学校教育」紙に対する評価や要望等が紹介されました。「学校の諸活動の紹介を」「各校の礼拝がいかに行われているかを知りたい」「カルト問題への取り組みについて特集を」「ノンクリスチャン教職員のあり方についての特集を」「AIとの付き合い方は今後大きな課題になるので紙面で取り上げてほしい」「新聞のメール配信、デジタルデータ共有化等の検討を」「紙媒体の新聞の継続を」「総会や会議の議事録は読む気が起こりにくい」等の感想・意見・提案が出されました。

それらをもとに各委員から多くの意見が出され、その中から次第に今後1年の新聞編集方針の方向性が見えてくることとなりました。コロナ禍が少しずつではあるが終息に向かう方向にある中、ここでプロテスタント系のキリスト教学校としての基本に立ち返り、礼拝をはじめとした学校でのキリスト教教育のあり方を編集の柱に据えていく。アンケートや座談会もその柱に沿って実施し、また年間10回発行する新聞の中にはその柱に沿った小さな特集やコラムを随時掲載していく。1年間その方向に沿って編集発行することで、各校それぞれのキリスト教教育の方法の違いを知ると同時に、共通する課題の発見もできる。その結果、キリスト教学校のより良いあり方について、諸学校共通の意識形成に新聞が一つの役割を果たすことができるのではないか、との、参加委員の意見一致をみました。

討議の中では各委員の所属学校の、礼拝や種々の教育活動・行事等の現状や課題等が報告されましたが、地区による、或いは校種による事情の違いも改めて知ることができ、このような機会の重要性を毎年のことながら感じることができました。今後の新聞作りに十二分に生かしていきたいと思います。

会は金清洛委員（広島女学院）の閉会祈禱で終了しました。

田村浩一〈香蘭女学校中等科・高等科キリスト教センター委員、教育同盟広報委員長〉

会場には委員会の9名が参加

第3回キリスト教活動担当事務職員研修会

主題　キリスト教活動支援とカルト

9月8日（金）、明治学院大学白金キャンパスにて、第3回キリスト教活動担当事務職員研修会が行われました。当日は、関東地方に台風が接近していたにもかかわらず、全国から20名の方々に参加していただき、感謝申し上げます。

本研修会は、キリスト教学校の中でも「キリスト教活動担当の事務職員」を対象としています。キリスト教学校ならではの教育や活動を行うことは、私たちの重要な責務ですが、専従の職員が少なく、学内での課題の共有がしづらいという印象があります。そこで、学校は違えど同じ業務を抱える仲間と、テーマを設けて課題を共有、討議する機会として、本研修会が企画されました。

明治学院礼拝堂にて

礼拝　北川善也氏

今回は「キリスト教活動支援とカルト」をテーマとし、約4時間半の研修を行いました。

プログラムは、同学院のチャペルで始まりました。北川善也氏（明治学院 学院牧師）より、「どこから何を聴き取るか」と題した開会礼拝をしていただきました。マルコによる福音書4章1―9節から、「人間の耳は、自分が聞きたいことだけ聞くようにできている。私たち教職員は、学生たちが聞く耳をもつ人間に育つよう、学校という土壌を整える必要がある」と話してくださいました。

その後、講義室のある2号館に移動し、塩谷直也先生（青山学院 大学宗教主任）より、「カルトを問うとは『愛』を問うこと」と題して、カルトの定義、日本でカルトが栄える理由、だまされないための練習の3部構成で講演いただきました。私は特に、カルトの愛は「条件付き」である（カルトにどれだけ貢いでも不要になれば切り捨てられる）ので、偽りの愛にだまされないために、愛への洞察力を養う必要があるという話が印象に残りました。

塩谷直也氏による講演

後半は3―4人のグループに分かれワークショップを行いました。各校のカルトに関する発生事案を共有したり、カルト対策について議論したりしました。その後、グループごとに討論内容を発表し、講師の講評を経て、会は終了しました。（閉会後、有志により情報交換会も行いました。ご参加いただきました皆様、ありがとうございました！）

短いプログラムではありましたが、参加者の皆様と濃密な時間を過ごすことができました。今回は本研修会初の対面開催でしたが、同じ業務を担当する仲間と一堂に会し、同じテーマに向き合うことができたのは、オンラインでは得られない体験であったと思います。

多田夏海
〈東北学院大学総務部総務課職員、キリスト教活動担当事務職員研修会実行委員〉

中小規模学校連携協力懇話会

対面では初めての第3回懇話会が9月11日（月）～12日（火）に長崎の活水女子大学で開催され、主講演者の梅花学園常務理事で同女子大学企画部長の藤原美紀氏が、学園のキャッチコピー（梅花学園では「チャレンジ&エレガンス」）を定め、学内施設を含め広報関連活動全般で統一的に集中使用した事例を紹介されました。また大学では産学連携の活動を学生全員が経験できるカリキュラム内容に沿い就職に強い女子大学のイメージ強化をめざし、高校生へのアピールに成果を上げていることを紹介しました。二日目の発題は余公裕次先生（活水女子大学）が他県への高校訪問の取り組みと課題、細海真二先生（同女子大学）はバランス・スコア・カードによる戦略思考する組織変革について講演しました。

活水女子大学小チャペルにて

2日間のグループ討議と全体討議の時間については不十分との声も聞こえました。この指摘は過去2回のオンライン開催と異なり対面の議論深化の側面を示すものにも思えました。

また開催校にとってオンライン配信、特にグループ討議設定は事務対応業務が事前準備段階から負担が重く、今回は講演と発題のみをオンライン配信としました。他の同盟主催の会議でも同様の声が聞こえてきますので、担当学校の負担軽減策を考える段階にきていると感じます。

開催後に懇話会アンケートを参加者（オンライン参加者を含む）からとりました。グループ討議はオンラインに比べ対面の利点を指摘する声が多く、また同盟加盟校の半数以上は中小規模学校であることから、理事会を対象とした連携協力懇話会は希少価値があるとの積極的な意見もありました。オンライン参加者からも次年度開催を継続して望む声が多数ありました。

湯口隆司
〈活水学院理事長・院長、懇話会座長〉

開会礼拝

グループ討議

キャンパスからの夕景

事務局だより

（お詫び）本紙2022年11月号～2023年10月号の2～4面上部欄外にある「キリスト教教育学校」の表記は、正しくは「キリスト教学校教育」です。お詫びして訂正いたします。

「紙面に写真が増えましたね、人と風景の写真から集会の様子がよく分かります」とのお声を頂きました。確かに前号の掲載写真は以前の倍以上です。対面研修が復活して講師・参加者、会場の室内・屋外等、それぞれの研修会の雰囲気が写真からよく伝わります。限られた紙面ですが記事と併せてなるべく多くの情報をお伝えできればと思います。

今号の各研修報告から山積する課題の一端が見えてきます。ガバナンスと寄附行為、中小規模学校の経営、カルトの予防、AIとの付き合い方、災害支援等々。11月の代表者研修会や今後の研修会で有意義な情報共有、意見交換を。

事務局長

＜行事予定＞

11／3～4	第65回学校代表者協議会（自由学園）
11	第９回キリスト教看護教育推進会議　（折尾愛真学園）
18	キリスト教学校教育懇談会 第21回講演会（オンライン）
2024年	
1／12～13	第66回小学校代表者研修会（青山学院横浜英和小学校）
6／7～8	第112回定時総会（関東学院関内キャンパス）

キリスト教Q&A

―キリスト教の理解を深めるために―

田島　卓
（東北学院大学 宗教主任）

Q.「隣人を愛せ」と言われても これだけ人々が分かり合えない世界で、「愛」だけで問題が解決すると思うんですか？

善いサマリア人の譬え話でも出てくる「隣人を自分のように愛しなさい」（ルカによる福音書10章27節・聖書協会共同訳）や、「敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」（マタイによる福音書５章44節・同訳）というような言葉は、いかにもキリスト教らしい教えだと考えられていますし、キリスト教の特徴をごく単純に描き出そうとするとこういった表現になるだろうということもよくわかります。ご質問は、たぶんキリスト教が言うことは楽天的すぎて現実的でないというあたりかと思いますので、その点を考えてみましょう。

「隣人を愛せ」という掟は、もとはレビ記の19章17―18節に出てきます。注目しておきたいのは、ここで言われている「隣人」が付き合っていて心地良い隣人ではないということです。「隣人」の言い換えとして出てくる「兄弟」「同胞」「民の子ら」はいずれも、憎み、戒め、恨む対象になっている存在ですから、血縁は近いながらも憎しみ合うようになってしまった存在だということでしょう。そのような人々に対して「愛しなさい」というのがこの掟です。ですから、「隣人を愛せ」という掟は本質的には「敵を愛せ」という掟であるはずです。

さて、問題は「敵を愛せ」という掟を人間が自力で行うことができるかどうかではないでしょうか。そしてその答えはほぼ間違いなく、「ノー」です。敵対してしまった人を愛せるかというと、人間である限りはおそらく不可能です。もし、人間が自力で人を愛せるようになっていたら、人類はとっくの昔に戦争を放棄できていたでしょう。しかし、そのことは「愛せない」という惨めさを正当化しません。ここで大切なのは、人を大切にすべきなのにそうできない、という厳然たる事実と向き合うことだと思います。

ご質問は、人々が分かり合えないのだから、解決などできないのだと諦めたいか、解決できない苛立ちをぶつける対象を探しているようにも読めます。しかし、そのどちらも本当の願いから逃げてしまう解決ではないでしょうか。

レビ記に立ち戻って考えたいのは、この掟には「私は主である」という文が直後に続けられることです。一見唐突ですが、なぜこの一文が必要かといえば、この一文がなければ、人は愛することなどできないからでしょう。

愛せないという事実に向き合い、かといって絶望するのではなく、神を求めて、いつかお互いに愛することのできる希望を持ち続けるための言葉として、「隣人を愛せ」という言葉を受け止めたいと思います。〈東北学院大学宗教主任〉